

台風の影響で雨と思われていたのがうそのような暑さとなった8月8日、入学時から楽しみにしていた東大見学会・企業大学訪問が始まった。今回の研修では、これからの私の進路や人生の選択に深く影響を与えてくれそうな体験をたくさんすることができた。ここでは、その中でも特に印象深かった出来事について述べたいと思う。

1 日目に行われた夏季プログラムは、近藤玄大さんの基調講演から始まった。近藤さんは幼少期をニューヨークで過ごし、東京大学で義手の研究をした後、ソニーに就職。その後ベンチャー企業、NPO 法人を立ち上げ、電動義手の開発に携わっておられるという方だ。近藤さんのたくさんの興味深いお話の中でも、「ものは世界共通言語」とおっしゃっていたのが心に残っている。これはものづくりに深く関わり、実際に電動義手という素晴らしいものを開発してきた近藤さんならではの言葉だと思う。ものづくりの本質を伝えるのに言葉は要らない。ものがすべてを語り、すべてを伝えてくれるからだ。ものづくりは、製作者と利用者のキャッチボールの中で行われる。製作者は、利用する人々にとってどんなものが喜ばれるのかを必死に考え、利用者は知らず知らずのうちにその想いを汲み取っている。製作者のさまざまな葛藤や想いが込められているものは、それを利用する人々と製作者を繋ぐ架け橋となり、その想いのやり取りの中でさらに優れた製品を生み出している。そうした工程を経ることで、「人間味のあるものづくり」というのができるようになるのではないだろうか。

また、近藤さんはベンチャー企業を立ち上げたり、新しい電動義手を開発したりと、これまでとは違うことをたくさん行ってきた。そのときは、周りからの反対やプレッシャーがあったという。しかし、出来ることからやって確かめていくと、徐々に流れができてきて、少しずつ自信につながっていき、最終的に周りの人々からの理解も得られた。私は近藤さんの、たくさんのことに挑戦していくという姿勢に感動した。新しいことに挑むときには、障害となるものが必ず存在する。しかし、それをひとつずつ乗り越えていき、その過程さえも自分の糧としていくことが大切なのだとは強く感じた。

近藤さんのお話は、どれも興味深く、時間が過ぎるのがあっという間だった。私も近藤さんのように、自分の意思を確かにもって、人の役に立てる役割ができる人間になりたいと思った。

その後、私たちの班は超高層建物の建築に携わってきた若松常美さんにお話を伺った。若松さんは、建物を建設するとき、良い建物を造るために最善をつくしているという。プライドをもち、すべてのことに妥協せずに取り組むことで、品質の良い、使い易い建物を造っている。顧客はどうしてもデザイン性を重視しがちだが、それは時とともに薄れていってしまう。しかし、使い勝手や安全性は、いつの時代でも常に追求される、とても大切な

ものなのだ。そのため、品質の確保は最重要項目なのである。

また、一級建築士の仕事をしていて自らにとってプラスになったことは、ものづくりの喜びや魅力を満喫し、自分だけの宝物を得られたことだとおっしゃった。良いものを造り、顧客に喜んでもらうことで感じる達成感やうれしさは、ものづくりを本気で突き詰めた人のみが味わうことのできる、とてもすばらしい宝物なのだろう。若松さんは、一級建築士の仕事を通してそれを得ることが出来たという。

最後に、これからの、考え方の多様性が求められていく社会で活躍できる人間になるには、高校生のうちからどのようなことを意識していけば良いのかと伺った。若松さんは、何かひとつ得意なことを見つけ、誰にも負けないという自信の持てるものを身につけることだとおっしゃった。自信が持てると、人間として大きくなれる。人間として大きくなるということは、自分中心ではなく、相手の立場になって考えることができるということだ。その能力は、大人になってからもとても重要になってくるものだという。また、失敗したり上手くいかなかったときも、どうやれば上手くいくのかを考えられるということも大切だ。ほかの人の意見に流されず、自分の考えをしっかりと持つことは、これからの社会を生きていく上で自らの武器となるだろう。

その後私たちは、ロシアビジネスに従事し、現在青山学院大学にてロシアビジネスを講義されている菅原信夫さんにお話を伺った。菅原さんは慶應義塾大学商学部を卒業後、伊藤忠商事株式会社へ入社。その後海外研修生としてハーバード大学院へ行き、ロシアビジネスに従事された。菅原さんは、現在の日本の教育について、文系と理系は分けて考えるものではないとおっしゃった。今の社会では総合的な能力が求められているため、ふたつのバランスを考えて教育するべきだということだ。また、海外でのビジネスで、外国に行くことで分かる自国の良さや欠点を知ることができたという。菅原さんのお話では、日本と外国との関わり方や、これからの人材を育てていくうえでの教育のことをたくさん伺うことができた。

その後、私たちの班は、土居義範さんにお話を伺った。土居さんはカリフォルニア大学卒業後、イギリス・アングリア・ラスキン大学経済学修士号を取得。その後、東芝・セミコンダクター社メモリー事業部にて USB Flash Memory の海外営業計画し、青年海外協力隊村落開発普及員としてベトナム北部フート省にて活動。そして、在トリニダード・トバゴ日本国大使館にて草の根・人間保障無償資金協力を担当し、現在笹川平和財団にてアジアにおける少子高齢化のプロジェクトを担当している。少子高齢化に向かっている社会でこれから生きていく私たちが高校生のうちから考えておくべきことはなにかとたずねた。土居さんは、日本や世界、そして自分の未来をひとりひとりが考えていくことが大切だという。悲観論が多い日本だが、そんなに悲観することはない。未来はどうなるのかは分からないからである。大切なのは、自分で変えてみせるという意味と、自分自身がなにをでき

るかと考える思考なのだ。また、土居さんは、一度きりの人生だからやりたいことはやるべきだとおっしゃった。できること、やりたいこと、やる価値のあることの三つをよく考え、自分で行動していくことが重要なのである。海外でたくさんの活動を行っていらっしゃる土居さんには、私が一生経験できないようなお話を聞かせていただくことができ、とてもうれしかった。

今回のディレクトフォース・笹川平和財団共催夏季プログラムでは、密度の濃い時間を過ごすことができた。基調講演での近藤さんのお話や、3人の講師の方とのグループディスカッションは、ほんとうに意義のあるもので、高校生の今だからこそこれからの進路に深く影響を与えてくれるものになったと思う。努力を積み重ね、数え切れない程の成功や失敗を繰り返した、人生の先輩方のお話は、どれも重みがあった。それを感じることもできた今回の体験は、私にとってとても貴重なものとなったのである。

私は今まで、自分の将来やりたいことについてあまり真剣に考えたことがなかった。しかし今回の東京研修を通して自分なりに考え、明確ではないが、やりたいことがだんだんと見えてきたと思う。今のこのやる気を忘れずに、自分の将来のために、今できることを精一杯やっていきたいと思う。